

Exhibition Vol.42

Archive
vol.44



羽部ちひろ + 赤松加奈
Chihiro HABU + Kana AKAMATSU

テ
ー
ブ
ル
に
ト
マ
ト

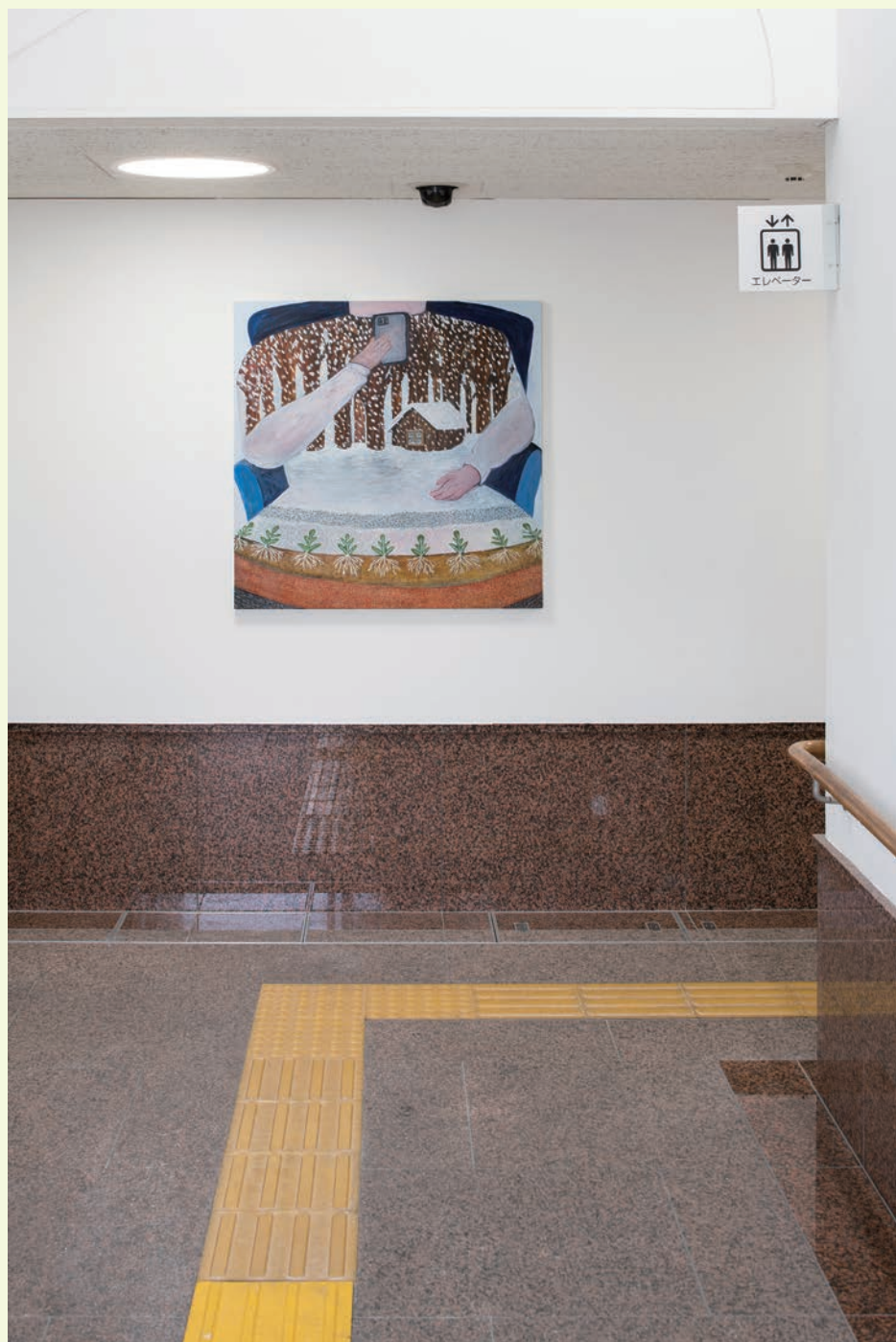
Tomatoes
on the Table

A
LAB

Contents:

1	エントランス / ロビー
3	ROOM1
7	倉庫
9	廊下
11	ROOM3
13	和室
15	アーティスト・トーク
27	プロフィール
29	出展作品リスト
31	フライヤー・配布資料





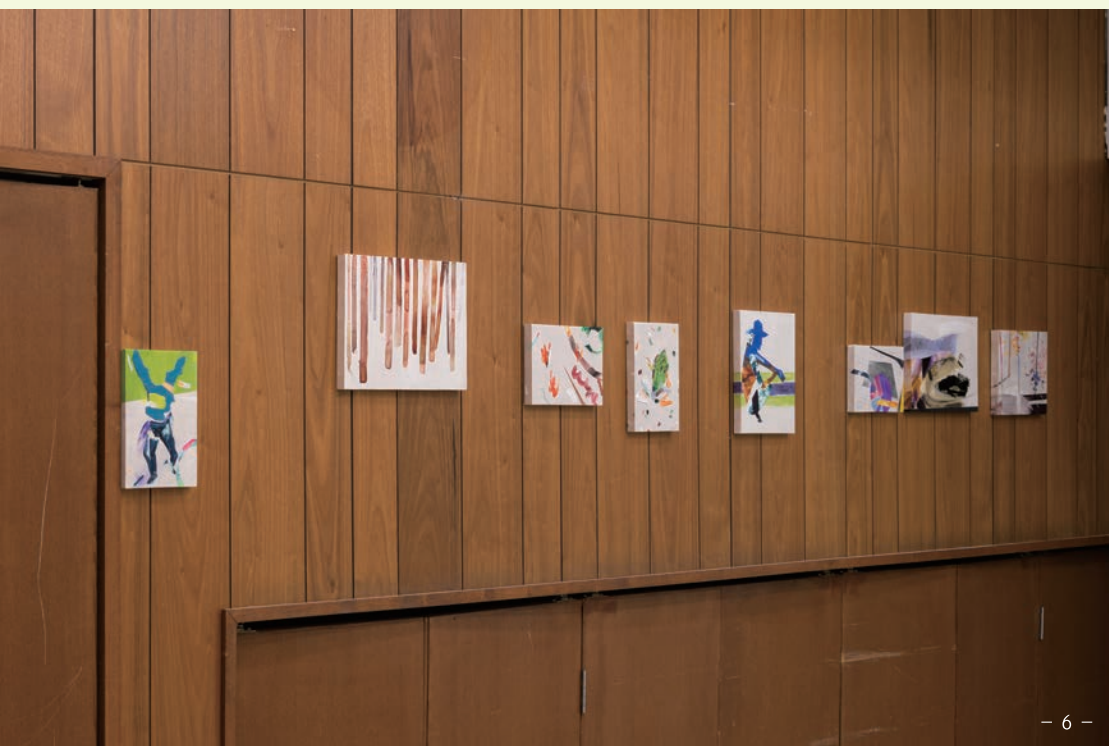




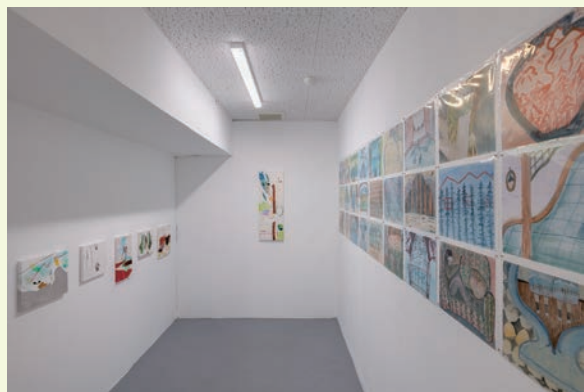
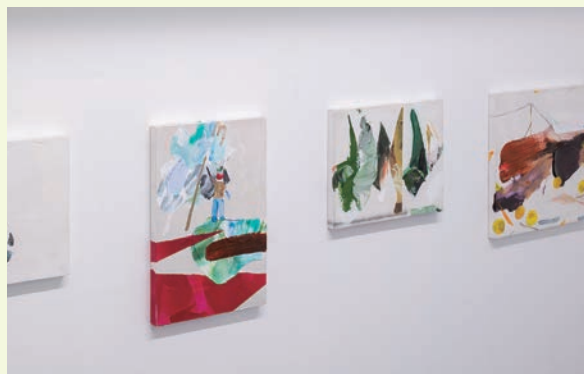


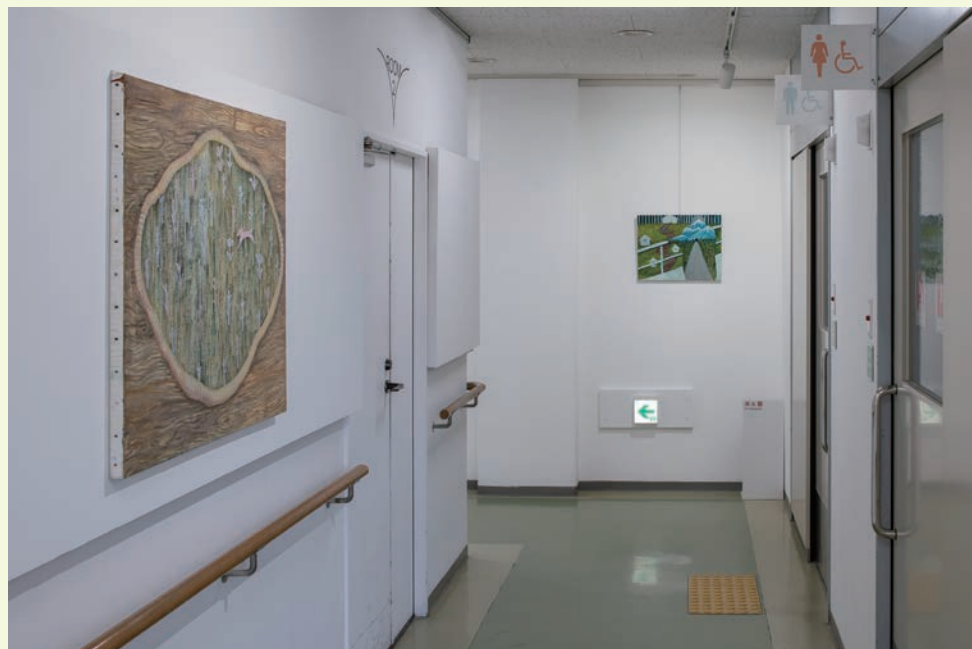
ROOM1









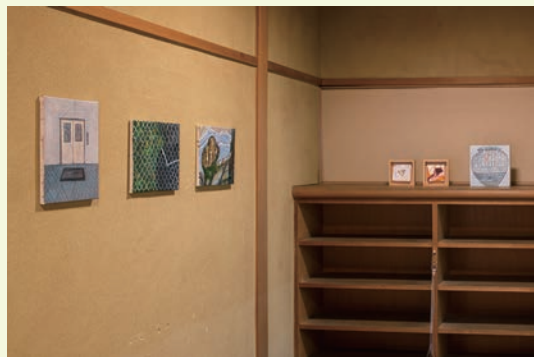












アーティスト・トーク

出演 羽部ちひろ、赤松加奈
聞き手 池上 司 (A-LAB アートディレクター)
日時 令和 6 年 2 月 24 日 (土) 14 時 ~ 15 時
場所 A-LAB ロビー・各展示室



トークイベントの様子

池上 司 (以下：池上) みなさん、こんにちは。池上と申します。本日はテーブルにトマトのトークイベントにお越しいただきありがとうございます。今回出品していただいている 2 人のアーティストをご紹介します。羽部ちひろさんです。

羽部ちひろさん (以下：羽部) 羽部です。お願いします。

池上 赤松加奈さんです。

赤松加奈さん (以下：赤松) 赤松加奈です。お願いします。

池上 最初にロビーで少しお話をお聞きしてから会場を一緒に回りながら作品のことなど伺っていきたいと思っています。ご質問などございましたら、その都度おっしゃっていただいても大丈夫です。最初に羽部ちひろさんの略歴を簡単にご紹介します。元々は札幌のご出身です。成安造形大学から京都市立芸術大学の大学院へ進学し、今は兵庫県の加西市を拠点に制作をされています。最近神戸を中心に発表される

ことが多いですね。私はこの展覧会を企画した者ですが、羽部さんが大学院生の頃に大阪の画廊で個展をされていたのを実は拝見していて、すごく印象に残っていたんです。一昨年、神戸の展覧会で久しぶりに羽部さんの作品を拝見して、学生の頃から良い意味で全く変わっていないなと思って。15 年くらい経っていますよね。変わらず良い作品を描かれていると思います。それで今回こちらの展覧会にお声がけをしたところです。それから赤松さんですけど、私は今回まで直接面識はなかったのですが、赤松さんの先生はよく存じてまして、先生を通じてご紹介いただいたところなんです。赤松さんは奈良のご出身で、現在も奈良で農業をしながら絵を描いていらっしゃるということで、京都や奈良など関西を中心に発表されています。そのお二人にまず初めにトピックとしてお聞きしたいのは、そもそもお二人とも美大に行かれているわけですけど、絵描きになろうかなと思いついたきっかけとかエピソードなどがあれば教えていただきたいと思

います。羽部さんいかがですか？

羽部 私は美術専攻の高校に行かせてもらっていて、その高校は途中から数学とかの授業がなくなるんです。その関係もあって、もう他の一般の大学はちょっと受験できないなというところもあったり、美術の大学に進学する子が多いクラスだったので、もう必然的に美大を目指す形になって今に至ります。

池上 北海道からだとか東北とか関東の学校の選択肢はありませんでしたか？

羽部 一人暮らしになるので、母が大阪の人なので、関西なら送り出せるみたいな感じでした。

池上 そういうことでしたか。美術専攻の高校に進学したのはもともと描くのが好きだったから？

羽部 そうですね。勉強より絵を描くのが好きだったので、普通の学校より美術の時間が多い美術コースがある学校を選びました。ずっとそこから絵を描いています。

池上 そうなんです。ありがとうございます。赤松さんはいかがですか。

赤松 私は小さい頃から絵は好きだったんですけど、途中からは勉強ばかりになって。そのあと学校に行けなくなってしまって不登校になったんですけど、そこから復活したのが高校で。その時に好きなことをもう一回やろうと思って、美術専攻の高校に入りました。そこで教えてくれた先生が絵描きの方で、絵描きってなれるんだと思ってそこから絵を描いていきたいなと思って今に至るという感じですね。

池上 ありがとうございます。早速ですけど、展示室に移動してお話を聞いていきたいと思います。今回、お二人一緒に展示されることは初めてですね。展示の企画の話をしますと、お二人にお声がけた時にあまりテーマというのはなかったんですね。ただ、春休みが近づいて来たけどもちょっと寒いし、早く春にならないかなという時期に明るくて楽しい賑やかな感じの展示空間を作りたいなという思いがうっすらとありまして。それでお二人にお声がけをしたんです。それぞれのスタジオに伺ってお話をさせていただいて。

羽部さんのところに伺った時には描きかけだったテ

ブルの絵があって、次に赤松さんのアトリエに伺ったら描きかけのトマトの絵があって、今描いていて京都の展覧会に出展しますとおっしゃっていて。それぐらいしか取っかかりがなくて。それからいよいよ年末にフライヤーとかを作らないといけないという時に「テーブル」と「トマト」しか見ていないので、それで「テーブルにトマト」という展覧会のタイトルにしました。ただ、想いとしてはお二人とも身近に見慣れた親しみやすいモチーフと明るい色彩で描いていっしょるので、テーブルにトマトがポンっと置いている様子はよく見るありふれた風景だけれども、もう一度見直してみると、身近なところや生活の中にも何かキラリとした、世界を変えるような発見があるんじゃないかとかあったらいいなと、そういう思いも込めてタイトルをつけさせてもらったんです。それで羽部さんにこういう展覧会のタイトルでいきたいんですけどって聞いたら、「あのテーブルの絵、描きかけだったんですけど、やめました。」と言われてどうしようかなと思ったんですけど、違う作品にテーブルっぽい絵があったんで、回収できてほっとしています。(笑)そんな感じで取り立てて大きなテーマのある展覧会ではないんです。お二人の絵が感覚的に合うなと思って、一緒に空間で見てみたいというそういう気持ちから今回の展覧会は始まっております。出展作品については、新作でもこれまで制作してきた作品でも、好きなものをたくさん持ってきてくださいという風にお願ひして持ってきていただいて、このような展示になっています。



羽部ちひろさん

制作について

池上 では次にインタビュー動画でもお話いただいていますが、絵の描き方や制作の部分について羽部さんから話を伺っていただけだと思います。この作品はテーブルですね。

羽部 テーブルです。

池上 何か透けている感じですか？



羽部 これは自分にしては珍しく、こうしたいというイメージが明確にあった絵で、テーブルの下この雑草を斑点で描きたいなと思って描いています。

池上 この雑草はつながっているんですか？

羽部 はい。この雑草が見えているところとかテーブルクロスの下を斑点だけで表現したいなと思って描いた絵です。

池上 そういうことだったんですか。こちらのソファの絵はどうなっているんですか？

羽部 これは結構昔に描いた絵だったんですけど、今回加筆という形でソファの周りの白い部分と人の肌



の部分に手を加えています。

池上 もともとモチーフとしてはその座っているソファの辺りから決めて描いていく感じですか？

羽部 多分この時はスカートを描きたくてこういう形にしたんだと思います。

池上 スカートを描くためにソファに座ってる感じの絵に？

羽部 そうですね。ちょうど冬だったので、セーターを描きたいなということもあって。

池上 ちょっと寒いから猫も？

羽部 抱っこしようかなって。で、元は真っ黒だったんですけど今回白くして、スカートの続きを、ここだけの空間の続きをソファの中に入れて面白いかと思って、加筆して描きました。

池上 スカートとか壺の絵とかTシャツの絵とかそういうシルエットの中に異なる風景を描くというのは羽部さんの一つのスタイルになっているのかなと思うんですけど、いつ頃からそういうスタイルが形成されたんですか？

羽部 多分大学院入ったぐらいから始めていると思います。

池上 何かきっかけとかあるんですか？

羽部 例えば壺があって、その壺に全然関係のない形がそこに見えたら視覚がおかしくなるような感覚がして、それがすごく面白いなと思って描き始めました。スカートとか壺とかを媒体とせずに風景だけを描いたとき、その絵が自分の中ですごい違和感があって、でもスカートとか壺とかの中に風景を描くことによって描きやすくなるというか。日常のものとして別の世界を描くという描き方が自分に合っているなと思ってずっとその描き方をしています。

池上 身の回りにある普段目にするもののシルエットの中に全く別の風景を想像して入れていくというような感じですか？

羽部 はい。

池上 この部屋は大きい作品を中心にきれいに並べようかなと思って配置したんですけど、何となくダイニング、リビング、ベッドルームみたいなイメージで並



べてみました。あの作品のスマートフォンの光で照らされているところに描かれているものはお城ですか？

羽部 はい。ディズニーランドにあるお城です。この絵の中の人がディズニーを検索しているシーンです。

池上 そうだったんですね。

羽部 検索している場所が浮かび上がるみたいなイメージで描きました。

池上 スカートの上のシャツは、夜空みたいになっているんですか？

羽部 夜のディズニーランドです。ディズニーランドのTシャツが売っていて、それを見て描きました。

池上 そうなんです。結構羽部さんの絵は謎の部分が多くて、あの絵も地層の断面みたいになっているじゃないですか。

羽部 そうですね。この頃は地層がブームになっていました。

池上 地層がブームというのはどういう流れで？

羽部 娘がちょうど小学3年生ぐらいの時、理科の教科書で地層とか植物の根が教科書に載っていて。それですごく面白くなって。でもそれ以前から地層とかはよく描いていたんですけど、この根が描いて

ある教科書の図像のようなものを見てから、こんな感じで描くようになりました。

池上 この絵の場合だと二人の人物がいて、ドレスの部分は山ですよね？山脈みたいな。その下に唐突に地層がきているんですけど、部分部分と絵の全体のつながりというか、これをどういう風に収めていこうかなというのはその時々を考えながら？

羽部 油絵で描いているドローイングの前にボールペンでノートに何回もいろいろな形を描いて、この形にしようとかいろいろ考えます。

それから、いい絵になりそうだなと思ったものを油絵



で描きます。ドローイングにして色もちゃんと塗って、これいけるかなと思ったら大きくするんですけど、その前段階というか、ドローイングの段階でいろいろ考えて決めてから取りかかっています。

池上 隣の倉庫の展示室には、たくさんドローイングを出していただいているんですけど、じゃあその前に何かラフなスケッチみたいなものがいっぱいあるということなんですね。これは絵になりそうだなって思う時のポイントとかありますか？

羽部 ポイントですか？ 勘というか、それはもちろん外れることがあって、描こうと思っていた最後の晚餐の絵はその勘が外れてつぶしたんですよ。でもやっぱりリスケッチしてドローイングしてある程度決まってから描いた方が私的にはすごく描きやすいというか。

池上 描くときには、もう絵の大体全部が見えているってことなんですね。

羽部 そのドローイングとかをやらないとうんってになってしまうことも多いので、やっぱりこの工程は大事なかなと思っています。

池上 なるほど。

観客 最初のボールペンのドローイングの時点で2つの風景はもう重なっているのですか？

羽部 ボールペンのドローイング時点でどんな風景を入れようかを考えています。山だったりいろいろな組み合わせたりしていい形を探します。

観客 例えばベッドルームに座っている人と草原の風景を分けてボールペンで描いているわけではなくて、ボールペンの時点でほぼこれになっているんですか？

羽部 ほぼこれになっています。もう覚えてないで

すけど、草原じゃないパターンもいくつかあったと思います。ドローイングの時点でいろいろ組み合わせてみて、しっくりきたのが草原だったので草原を描きました。

池上 いつも不思議だなと思っていて、具体的なモチーフがありそうでないというか。割とこういうイメージで作っていらっしゃるというのは伺っていましたが、実際に作り方をお聞きすると、どういう風に考えて作っているのか何となく察してきました。ありがとうございます。では赤松さんにもお伺いしていきたいんですけど、赤松さんの最近のモチーフは、トマトとか農作物とか植物系が多いですけど、何かこういう風な絵にしようというのは、コラージュを作られるところから始まるという風にお聞きしています。

赤松 そうですね。

池上 この絵の場合、具体的にはどのように？

赤松 この絵を描いた時は、臨月でお腹がとても大きい時にユサユサしながら、トマト収穫の仕事をしていました。トマトを採ってみるとすごくパンパンで生き生きしていて、私の体と一緒にだんとか思いながら見ていて、これを絵にしたいと思ったんですけど、細かいことはできないし、長時間描くこともできない。じゃあどうしよう、トマトの色の強さと絵具の質感だけで描けないかと思って描きました。

池上 なるほど。赤松さんの場合、畑の風景であったり、何か目に見えたものとか、実際にある風景をモチーフにして描いていらっしゃると思うんですけど、これは絵になるかなとかならないかなというのはどういうところで見極めている感じですか？

赤松 パッと見たときに子どもの目というか初めて見たような気持ちでわあって感動したものはこれいいなとか、これ怖いなとか。初めて見たみたいに衝撃を受けたものは描きたくないような気がします。

池上 セイタカアワダチソウでしたっけ？ これはどの辺りがフィットした感じですか。

赤松 これは産後の時ですけど、1ヶ月家でひきこもり状態で新生児を見ないといけないので、だいが自分の体も元気になって、親に赤ちゃんを見てもらえるよ



赤松加奈さん

うな日に散歩で外に出たら、夏だったのが急に秋になっていて。その風景が新鮮で。そこでセイタカアワダチソウが風に揺れていて、めっちゃきれいってすごく感動して、その時の揺れている一瞬一瞬を写真に撮ったら構図がビュンって変わって、感動したんですね。

池上 動きがあって？

赤松 はい。

池上 なるほど。そういう体験によって、感動とかこういうところを発見したみたいなの。

赤松 何か黄色いものがぼんぼんって飛んでいるように見えちゃったとか。トマトがトマトじゃなくて、赤いばちばちのまんまるいものに見えちゃったみたいなの。そういうものを描きたいというか、それを留めたいというか。

池上 そのものはそのものなのだけれども、それがちょっと違う色と形と質感のものに見えるんですね。なるほど。何かこの辺りの小さい作品とかもこれは何かご近所の風景ですよね。これは死んだカエルでしたっけ？

赤松 べたんって上を向いて死んでいたカエルが、わーって思って、それを作品にしてるんですけど、ちっちゃい絵の方がその、わーって思ったまんまの新鮮な感じで描いているような気がして。

池上 それはスピード感も関係しているんですかね。

赤松 そうですね。写真を撮るときみたいな感じで、これを撮っておきたい、留めておきたいみたいな感じで、大きい絵になるとそれをどうやって組み合わせたらその空間になるかなみたいな。



池上 大きい作品と小さい作品で構図もちょっと違うんですね。隣の展示室にある湘南の絵は部分部分をコラージュで作っておられて、それに合わせていらっしゃるんですけど、そういう風にやっぱり小さい作品と大きい作品でアプローチやプロセスが違ってくるというのはなるほどと思いました。

赤松 大きい絵は一つ一つの、ハッと思ったものの集まりで作ることが今までは多くて、この時は自分の体とか気持ちに余裕がないから、こういう形になったという感じで、今後こういう風になるのもあるのかもしれないへんなという感じになってきました。

池上 ああ、そうですね。

赤松 小さいものを集めて、何かを作るということだけじゃなくていいなって。

池上 そうですね。このトマトの作品は制作途中に拝見している時とちょっと変わったなという印象があったんですよ。以前の作品とかもスタジオで拝見していただんですけど、背景との関係だったりとか、透明感とか光の感じとか構成をすごく丁寧に特にコラージュを元にしていらっしゃるの、色の面の重なりとか具合とか、そのレイヤー的に気にされている部分もあるのかなとか思ってたんですけど、トマトを見た時に吹っ切れ感がすごくあってすごく気持ちいい伸びやかさがあって、トマトってこういう風に描けるんだ。と思ってすごく印象深かったことを覚えています。

赤松 何か制限がかかるのがいいのかもしれないという気もしています。

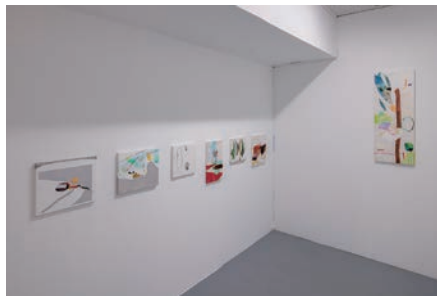
池上 なるほど。思い切ったその分できるという感じですね。すごく面白かったですね。それでは他の展示室もせっかくですので回ってみましょうか。

池上 この倉庫の展示室は、どういう風に使うかすごく考えていたんですね。羽部さんも赤松さんもドローイングや絵の元になっているコラージュがたくさんあるので、どこかで展示したいなと思っていたのですが、それをどういう風に見せたらいいのかなということを考える中で、狭い空間にぎゅうぎゅうに入れてみようと思いつきました。そのきっかけは階段の下にある赤松さんの湘南の砂浜の絵なんですよ。



どういふシチュエーションで描かれた作品か、お話を聞かせていただけますか？

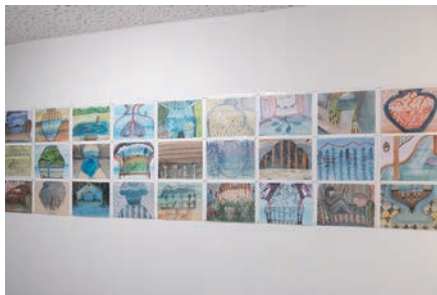
赤松 昨年、湘南をリサーチして作品制作と展示をする機会をいただきました。普段見ない海に感動して、普段は農業をしている風景の中でいろいろなものが生まれてきていて、でもイタチが死んでいたり。生きているものも死んでいるものも、その中にあるということにすごく感動して風景を見ていたんですけど、海を見たら海こそそうなんや、という思いがして、その砂浜を見たら打ち上げられてきたものが、私が構図を考えなくてもこのまま絵になるような形で打ち上げられていて。それをそのまま絵にしたいなって思って。落ちていたものとかをコラージュにして、それをもう一度構成しなおして制作しました。



池上 そのコラージュとかを展示させてもらっていて、この辺りの小品もこれも湘南のシリーズですよ。コラージュにしたものを一回、小さいタブローにしておいて、それで大きく描かれているということだったんですけど、あれも何か変な絵だなと思っていて、砂浜を真上からフラットに描いているわけですよ。

赤松 そうですね。

池上 あれも大きい絵なので、どうしようかなと思っていたときに、この狭い空間にぎゅうぎゅうに入れてみると、ロビー辺りからこの倉庫の入り口を覗くとあの絵が倉庫の入り口いっぱいに見えたんですよ。まるで別の世界に飛ぶような感じがして面白いなと思って、この小さなスペースにぎゅうぎゅうですけど入れさせてもらいました。あとは羽部さんのドローイングがすごくたくさんあって。これはもう結構ボールペンのスケッチを経て、その絵の形が作られている感じですか？



羽部 そうですね。

池上 油絵のキャンパスの方だとフォーマットが縦だったり、四角だったり、いろいろあるんですけど、

この段階では A4 のこの形なんですネ。

羽部 そうですね。この紙が良くて。

池上 どういうところ？ サイズ感とか？

羽部 これは半紙なんですけど、すぐ手に入るの。

池上 それに油絵具で描いている？

羽部 描いています。

池上 下書きとかするんですか？ 直接油絵具で描いている？

羽部 ドローイングを見て描いたり、部分によってはドローイングなしでそのままだったり。

池上 結構想像して描きますよね。例えばあちらにピンクの花が咲いている木があって、これ何の木ですかって聞いたら適当ですって言われて、何々の木とかそういう具体的なものがなくて。あの猫の絵も、ああいうふうに見ると、チェシャ猫のようだったりするじゃないですか。こっちにディズニーあるしとか思って。で、イメージして描きましたか？ と聞いたらいや違いますって。そういう外し加減があって。

羽部 「木」っていう自分の中の形みたいなのがあって、それを描いています。

池上 頭の中のイメージをそのまま出していらっしゃる感じですよね。だから風景とかにしても、具体的な場所とか物とかのモチーフがありそうでないというところが、観ていて惹かれるところですね。

羽部 モチーフを見て描くと、何かちょっとつまらないというか、違う気がして。

池上 なるほど。頭の中で描いているイメージだけで、ストーリーがあるようなそういう絵を描いていくというのは、なかなかすごいなと思って。今回選んで並べていただいて思ったんですけど、壺の形とかソファの形とかシルエットが似ていますよね。全く別物なんですけど、重なって見えるときがあって、カップケーキとか水着とかがあって、そういう共通した方向性とかがあったりするのかなと思って観ていました。では次に行きましょう。これは何ですか？

羽部 これは剥製の絨毯（じゅうたん）を描きました。

池上 虎皮みたいなやつですよね。

羽部 私の中にあるイメージの虎皮の剥製絨毯がこの



形で、毛並みがフローリングだったり、この部屋の向こう側に見えているであろう山だったりを描きました。

池上 透けている感じ？ フローリングの板目の模様みたいなものと壁の向こうの風景が、重なっているという感じなんですね。聞いて良かった。なるほど。この辺りがTシャツ動物シリーズですよ。これはTシャツを見て思いつくんですか？

羽部 Tシャツというか、ひらめきというか。これ面白いかなと思って始めて、それまでは洋服シリーズだとスカートの形に別の風景を描いていたんですけど、ブランドのロゴのワッペンとしてそこに動物がいるものをチョイスして、その動物がそのような風景を描こうかなと思って始めました。

池上 この廊下の展示は、動物シリーズの作品を並べて ROOM3 にある赤松さんの馬の作品につながるような感じにしたいと思って並べてみました。このお馬さんは随分前の作品なんですよ。

赤松 大学院の修了制作の作品ですね。





池上 このお馬さんは赤松さんのホームページで拝見して、あるならぜひ出してもらわねばと思ってお声がけをしたところ、胴体が真っ二つになってたよね。

赤松 そうなんです。

池上 真っ二つになっていてこんな状態ですけどみたいな話で。搬入してから手術をしていただいて、何とか持ち直した感じですよ。そもそもなんでこういうの作られたんですか？

赤松 絵画空間を作ることに対してすごく苦手な意識があって。

池上 平面の中に空間的なものを作るのが苦手？

赤松 はい。大学院の時はそれをずっと思っていて。で、一回中身を全部立体にしたら分かるんじゃないかなと思って。なので立体を絵のつもりでやっているというか。絵のつもりで配置してみるとかをその時に思ってやっていました。

池上 やってみてどうでした？

赤松 やる前とやった後では捉え方が変わっていて。何となく自分の中で分かるようになって空間を捉えられるようになって、大学院修了の時にこのまま立体もやりたいなって思ったけど、空間がないと大きさを考えられないなって思ったので、じゃあ平面に戻せるか

な、戻してみようと思って絵をもう一回描くようになったら、あっ！変わってる！みたいな、感覚が変わったような感じがしました。

池上 このお馬さんを最初に展示された時はもっと色々なパーツがありましたよね。

赤松 はい。もうちょっとありました。実はちょっと違う作品やったんです。羽部さんの絵と一緒に置かせてもらったり、ここに木の桟があったり、コラージュを絵にする時にもう一回構成しなおすことと一緒にやなと思って、どうやって空間を絵だと私は認識してやっていたんやろうと思いつつながら展示しました。

池上 なるほど。実はこのお馬さんの仲間達を出していただくと思って、この桟はたまたまなんです



ね。本来この部屋の壁には桟はなくて、真っ白な部屋ですけど、真っ白なギャラリーっぽい空間だとちょっと冷たい感じというか寂しい感じがあるなと思っていて。この桟は前回の展覧会の作品のためにつけていたんですけど、撤収していた時にこの桟が見えて、すごく柔らかな雰囲気になっていたのをそのまま残しました。それでは最後に和室の方をのぞいてみましょうか。ここにもいろいろな作品を展示していただいているんですけど、お二人に好きにしてくださいとお任せしてこんな感じの展示になっています。ちょっとお聞きしないといけないのは土器ですね。土器についてお話し伺えますか？



赤松 大学に所蔵されている縄文土器と現代アートと一緒に展示された展覧会を観る機会がありました。それを見て、これ一人でできると思って。これはうちの田んぼで土を取ってうちで焼いて、ってしたら普通の農業の風景を絵にしていることと同じように、田んぼのものだけで何か作品ができるかなと思って作りました。

池上 材料から買わなくてもそこにあるものでできるんじゃないかと。

赤松 こ掘ってって言って、掘ってもらって。いらなくなった草とかがいっぱい出るのをそれを乾燥させてから一緒に入れて、焼いてみたらできました。

池上 かなりよくできていますよね。

赤松 実はあれは窯で焼いてもらったんです。教えに行っている高校が芸術高校なので、その陶芸の先生に相談したら、割れたらあかんから一回焼いてみようって言ってもらって。それで、窯で焼いてもらった

らすごいい土ですって言ってくださって。頑張ったら食器用にもできるかもしれないと言ってはって。

池上 あの映像も話を聞かせてください。

赤松 映像は、自粛の時に家から出られなくて結構うわーっとなってしまっ。でも、自分の範囲の半径5m以内とかのものだけで作品を作ろうと思って。で、普段絵にしているのは、生から死まで全部あるものをもう一回構築しなおすみたいな感じを思っていたので、家の周りとか田んぼとかにあるいろいろな花びらとか、死んだ虫とか、洗濯ばさみの端っことか、イチゴのつるを留めるプラスチック片とか、そういうものを持ってきて、生きているものから死んでいるものまで全部ここにあるという状態を水をためた中に作って。で、それを私はいつも構成しなおして絵にしているからどうしたら他のものになるかなって思って、定点でずーっとぐるぐる回ってる姿を撮ったらどうだろうということで作りました。

池上 たまにぐるぐる回っていて、花びらとかきれいだなとか思っていたら、たまに虫とかが出てくるから、ちょっと油断できない感じなんですけど、焼き物とか映像とか立体にしてみたりとかいろいろ自由に制作していますね。

赤松 いろいろ自由に…。飽きるのかな？

池上 飽きるんですか？

赤松 絵ばかりやったらちょっと、何か違うことをやってみたくなっ。

池上 そうですよ。自由にいろいろやりたいことやってみましょう。せっかくですので、何かご質問やお聞きになりたいことなどございませんでしょうか。

観客 馬の構造はどのように制作されていますか？

赤松 角材で大まかな骨を作って、綿とか発泡スチロールで肉付けをしています。あとはどうすれば形になるんだろうと思いながら、キャンバスを立体的に縫いながらはめていきました。

池上 ありがとうございます。他ございますか？

観客 羽部さんにお聞きしたいのですが、作品の中で2016年に制作されて2023年に加筆された絵があったと思いますが、制作された時はこれで良いと思って

いたが後になって違うなと思ったのか、それともできた時からじっくりきていなかったのでしょうか？

羽部 できた時にはもうこれでイケてると思って展覧会にも出していたのですが、制作した頃から結構時間が経っていて、この絵はグループ展に出した絵で、一回展示して以降家の倉庫で眠っていました。一回展示したら同じものを何回も展示する事が少ないので、それがすごくもったいないなと思っていたこともあり、今回展示したいなと思ってこの作品を眺めて、もうちょっとこうした方が面白いかなと思い加筆しました。

観客 それは結構あることですか？ 前の作品を見てちょっと違うのかな。

羽部 あまりないですね。

池上 この部屋に実は他の部屋の元ネタじゃないですけど、羽部さんのボニーテールの絵とかヨークシャテリアとかいくつかありましたよね。元になっているものが。赤松さんのコラージュも、前の展示室の大きいキャンパスになっている絵の元のコラージュとかもあるんですね。今回二人合わせて 160 点ぐらいという

ことでね、すごくたくさんお持ちいただいたんですけども、もちろん新作で作られたものもたくさんあるのですが、そのドローイングやコラージュ含めてあと過去の作品、そういう風に昔、展覧会に出されたけれども今回もう一回出したいと思って出された作品、いろいろな時代の作品があって、今回こういう風に一同に出されてみていかがでしたか？

赤松 何か遊園地みたいだなと思って。自分の作品ばかりじゃないので、初めて会った羽部さんと作品を出したら羽部さんの作品は、絵の中で遠くまで行っちゃうし、私の絵は色とかがバンってきて平面的に見える時も多分あって、景色に見える時もあって、目がパニックになる展示なんじゃないかなって、すごい面白いなと思って。その組み合わせの面白さばかり感じていましたね。

池上 羽部さんいかがですか？

羽部 私も今回出させてもらった昔の作品は、その 100 号の加筆したもの以外は個展で出していたものばかりで、他の作家の方の作品と一緒に出したのが初めてなので、自分だけの作品だけじゃない空間に置い



てもらったときに、また見え方が違うなど。確かに目がパニックになるなと思います。

池上 単純に点数も多いですからね。この和室の部屋も少しアウトドアっぽくしたかったんですよね。土で作った焼き物とか。羽部さんのドローイングのモチーフのテントや、車でドライブとかそういう繋がりです。うっすらと考えながら構成を考えていました。他にご質問やご感想などございませんか。

観客 展覧会のタイトルが面白いなと思いました。羽部さんと赤松さんの絵を拝見していると、赤松さんは平面的でフラットなところから目に飛び込んできて、羽部さんはすごく奥行きのあるそのコントラストが面白いなと思いました。大地や人を描いたその中に風景が隠れていて、パースペクティブがより強くなって奥行きがあるように見えるその豊かさと広がり、単体としてのフォルムがミックスされていて、タイトルが物語っているようでお二人のテーマに沿っているなと思いました。また羽部さんの受け皿の広さみたいなものを感じて素敵だなと思いました。

池上 ありがとうございます。それではお時間になりましたので、アーティスト・トークを終わりたいと思います。本日はみなさんありがとうございました。

羽部・赤松 ありがとうございました。

羽部ちひろ | Chihiro HABU

1982年 札幌市出身

2005年 成安造形大学洋画クラス 卒業

2007年 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻油画 修了

2010年 京都市立芸術大学大学院博士課程(後期)満期退学

【受賞歴】

2003年 第3回武井武雄記念日本童画大賞

【コレクション】

岡谷市イルフ童画館

京都銀行

【主な個展】

2022年「羽部ちひろ個展 しらないはなし」、KOBE STUDIO Y3、兵庫

2021年「羽部ちひろ個展 近くから遠くへ」、GALLERY301、兵庫

2014年「羽部ちひろ個展 ここからみる世界」、高島屋大阪ギャラリーNEXT、大阪

2009年「羽部ちひろ個展」、MEM、東京

2008年「羽部ちひろ展」、Oギャラリーeyes、大阪

2007年「羽部ちひろ個展」、Gallery Den、京都

【主なグループ展】

2023年「グループショウ「30-40」」、KOBE STUDIO Y3、兵庫

2017年「GALLERY wks. 設立15周年記念展「祭」」、GALLERY wks.、大阪

2016年「作品中! アゲイン」、galerie16、京都

2013年「むこうスタジオのオープンスタジオ2」、むこうスタジオ、京都

2013年「KYOTO STUDIO」、@KCUA、京都

2012年「よくばりのはじまり」、@KCUA、京都

2011年「むこうスタジオのオープンスタジオ」、むこうスタジオ、京都

2011年「in my room 3」、FUKUGAN GALLERY、大阪

2009年「「F IX」展」、元・立誠小学校、京都

2008年「ペインティングの恋人」、海岸通りギャラリー・CASO/MEM、大阪/ 東京

2008年「in my room 2」、FUKUGAN GALLERY、大阪

2008年「繻いの光景II—Memory and an ideal view」、O ギャラリーeyes、大阪

2007年「ART AWARD TOKYO 2007」、行幸地下ギャラリー、東京

2007年「in my room」、FUKUGAN GALLERY、大阪

2007年「作品中」、galerie16、京都

ソファやクッション、洋服など日常にあるものをモチーフに描きます。日常にある何気ない物と映画や雑誌で見た写真、SNS で投稿される非日常と感じる海外の景色なども私自身の中に蓄積されていき、それらのイメージを組み合わせ描きます。近景と遠景を一つの画面に描くことで身近なものから世界の見え方の多様性を表現できればと考え制作しています。

赤松加奈 | Kana AKAMATSU

1990年 奈良県出身

2013年 京都造形芸術大学美術工芸学科油画コース 卒業

2015年 京都造形芸術大学大学院芸術表現専攻 修了

【受賞歴】

2019年 群馬青年ビエンナーレ2019 大賞

2018年 FACE 2018 損保ジャパン日本興亜美術賞 審査員特別賞

2018年 シェル美術賞2018 入選

2014年 ワンダーシード2014 入選

【コレクション】

群馬県立近代美術館

東京Dタワーホスピタル

【主な個展】

2023年「土の声を聞き、風とあそぶ」、NEUTRAL、京都

2021年「赤松加奈 展 みんなの部屋」、喜多美術館、奈良

2021年「赤松加奈 展 ここで描く」、galerie16、京都

2019年「赤松加奈 個展」、フォルテック一級建築士事務所、東京

2019年「新世代への視点2019 赤松加奈展」、コバヤシ画廊、東京

2018年「真夏の窓辺」、フォルテック一級建築士事務所、東京

2015年「KANA AKAMATSU」、galerie16、京都

【主なグループ展】

2023年「第30回 心に響く小品展」、ギャラリーヒルゲート、京都

2022年「テラスアート湘南2022」、テラスモール湘南、神奈川

2022年「奈良・町家の芸術祭 HANARART 2022」、旧荒木邸、奈良

2022年「川村悦子&田嶋悦子 展 一華と夢」、ギャラリー恵風、京都

2022年「MESSAGE 2022」、コバヤシ画廊、東京

2022年「ARTISTS' FAIR KYOTO 2022」、京都府京都文化博物館 別館、京都

2022年「第29回 心に響く小品展」、ギャラリーヒルゲート、京都

2022年「奈良・町家の芸術祭 HANARART 2021」、Art-Space TARN、奈良

2021年「第28回 心に響く小品展」、ギャラリーヒルゲート、京都

2021年「MESSAGE 2021」、コバヤシ画廊、東京

2020年「小さな絵と小さなおうちと小さな木のもの展」、和詩倶楽部 柳小路店 特設ギャラリー、京都

2019年「群馬青年ビエンナーレ2019」、群馬県立近代美術館、群馬

2017年「銀座アート動物園2017」、ギャラリー杉野、東京

2016年「若いクリエイターによる合同展示」、The Terminal KYOTO、京都

2015年「キテ・ミテ中之島2015」、京阪電車駅構内、大阪

2013年「はじまりの部屋」、康耀堂美術館、長野

2012年「奈良・町家の芸術祭 HANARART 2012」、八木札の辻交流館、奈良

関西を中心に活動。結婚し農業をする傍ら絵を描き、また、高校やフリースクールなどで子どもたちと絵を通して交流してきた。農業風景の中にある生と死、そしておおらかで切実な周囲の人々の姿を描いている。

出展作品リスト

H= 羽部ちひろ A= 赤松加奈 タイトル、技法・材質、サイズ(縦×横×奥行)、制作年

【エントランス・ロビー】

- H 《雪が降る森》キャンバス、油彩、1000×1000×25mm (2024)
《壺(滝の中に飛び込む)》キャンバス、油彩、860×830×35mm (2021)
A 《おいかけてこないでね》アクリル、キャンバス、パネル、727×910×25mm (2021)

【ROOM1】

- H 《思い出す》キャンバス、油彩、650×725×25mm (2023)
《しゃがむ》キャンバス、油彩、725×635×23mm (2022)
《しらないはなし》キャンバス、油彩、1303×1620×32mm (2022)
《眠れない夜》キャンバス、油彩、1120×1455×35mm (2021)
《この森をぬけて》キャンバス、油彩、1620×1303×35mm (2016、2023 加筆)
《ピクニック》キャンバス、油彩、803×1000×25mm (2021)
A 《もういいかい》アクリル、キャンバス、板、175×200×5mm (2021)
《すすき》アクリル、キャンバス、パネル、457×380×23mm (2024)
《Four fruits》アクリル、キャンバス、パネル、1303×1620×48mm (2024)
《オクラ》457×380×23mm (2023)
《セイタカアワダチソウ_風吹く川沿い》アクリル、キャンバス、パネル、533×457×20mm (2024)
《セイタカアワダチソウ_信号》アクリル、キャンバス、パネル、533×457×20mm (2024)
《セイタカアワダチソウ_道路脇》アクリル、綿布、パネル、410×320×18mm (2024)
《みかんの葉しげる》アクリル、綿布、パネル、222×275×20mm (2021)
《ギョルギョルギョルギョル》アクリル、綿布、パネル、242×333×20mm (2021)
《荷車》アクリル、鉛筆、キャンバス、158×227×20mm (2019)
《なじむ》アクリル、綿布、パネル、275×222×20mm (2023)
《だれの仕業》アクリル、綿布、パネル、227×158×20mm (2022)
《燃ゆる》アクリル、綿布、パネル、227×158×20mm (2022)
《林道》アクリル、綿布、パネル、335×243×20mm (2022)
《Jump》アクリル、キャンバス、パネル、227×158×20mm (2019)

【倉庫】

- H 《ドローイング》紙、油彩、330×235mm (2022-2024)
A 《きょうの海のはなし》アクリル、キャンバス、パネル、1803×1803×48mm (2022)
《コラージュ》紙、ダンボール、アクリル絵の具など (2022-2024)
《落としもの》アクリル、綿布、パネル、242×333×20mm (2022)
《波》アクリル、綿布、パネル、242×333×20mm (2022)
《毎日のつづき》アクリル、綿布、パネル、220×273×20mm (2022)
《山の少年》アクリル、綿布、パネル、333×225×20mm (2022)
《松林》アクリル、綿布、パネル、222×275×20mm (2022)
《転がったみかん》アクリル、綿布、パネル、300×300×20mm (2022)
《昨日できた景色》アクリル、綿布、パネル、700×248×20mm (2022)

【廊下】

- H 《剥製の絨毯》キャンバス、油彩、727×910×25mm (2022)
《絨毯の柄》キャンバス、油彩、727×910×25mm (2022)
《ベランダから眺める》キャンバス、油彩、400×520×23mm (2022)
《キツネのワンポイントシャツ》キャンバス、油彩、540×655×23mm (2022)
《ワニのワンポイントシャツ》キャンバス、油彩、455×530×35mm (2022)
《夜に散歩》キャンバス、油彩、405×570×17mm (2023)
《寝る前に読む》キャンバス、油彩、727×910×25mm (2023)

【ROOM3】

- H 《犬の柄の壺》キャンバス、油彩、220×270×15mm (2024)
《早朝の散歩》キャンバス、油彩、400×400×35mm (2023)
A 《animals》アクリル、キャンバス、木材、針金、発泡スチロール、綿、サイズ可変 (2015)

【和室】

- H 《白い壺の模様》キャンバス、油彩、200×200×35mm (2023)
《蹴る》キャンバス、油彩、220×270×15mm (2024)
《フェンスの向こう》キャンバス、油彩、270×220×15mm (2024)
《エレベータについて》キャンバス、油彩、270×220×15mm (2024)
《壺（洞窟の入り口）》キャンバス、油彩、270×220×13mm (2024)
《車で向かう》キャンバス、油彩、400×400×35mm (2022)
《ソファでくつろぐ》キャンバス、油彩、320×410×20mm (2021)
A 《drawing》アクリル、紙、130×130×35mm (2020)
《ガ》アクリル、紙、130×130×35mm (2020)
《砂糖壺》アクリル、綿布、パネル、273×220×20mm (2022)
《むいた桃》アクリル、綿布、パネル、222×275×20mm (2024)
《drawing》アクリル、紙、330×240×35mm (2020)
《小太郎》土、120×55×120mm (2023)
《春の草花のつぼ》土、130×120mm (2023)
《泥芋の葉のつぼ》土、250×175mm (2023)
《伸びゆく紫 No2》アクリル、キャンバス、パネル、158×227×20mm (2019)
《モモ》アクリル、綿布、パネル、222×275×20mm (2023)
《田に住む生き物たちのつぼ》土、210×165mm (2023)
《エブロン姿の花瓶》土、90×82mm (2023)
《ねぎ坊主のつぼ》土、262×195mm (2023)
《日常とイメージのドローイング》 シングルチャンネルビデオ、5分18秒 (2020)

2024年2月17日 | 土 |
— 3月31日 | 日 |

A-LAB Exhibition

Vol.42



羽部ちひろ + 赤松加奈
Chihiro HABU + Kana AKAMATSU

ト マ ト テーブル
Tomatoes
on the Table



A
LAB

左：赤松加奈《オケラ》2023 | 右：羽部ちひろ《風に揺れる》2023

テーブルにトマト

羽部ちひろ+ 赤松加奈

2024年2月17日 | 土 | — 3月31日 | 日 |

H = 羽部作品 A = 赤松作品

1F エントランス / ロビー

- H-①《雪が降る森》キャンバス、油彩、1000×1000×25mm (2024)
- H-②《大地の中心に飛び込む》キャンバス、油彩、860×830×35mm (2021)
- A-③《おなかでかきとる》アクリル、キャンバス、パネル、727×910×25mm (2021)

ROOM1

- H-④《思い出す》キャンバス、油彩、650×725×25mm (2023)
- A-⑤《もういいかい》アクリル、キャンバス、板、175×200×5mm (2021)
- A-⑥《すき》457×380×23mm (2024)
- H-⑦《しなむ》キャンバス、油彩、725×635×23mm (2022)
- H-⑧《しらないはなし》キャンバス、油彩、1303×1620×32mm (2022)
- H-⑨《眠れない夜》キャンバス、油彩、1120×1455×35mm (2021)
- H-⑩《森をぬけて》キャンバス、油彩、1620×1303×35mm (2016、2023 加筆)
- H-⑪《ピクニック》キャンバス、油彩、803×1000×25mm (2021)
- A-⑫《Four fruits》アクリル、キャンバス、パネル、1303×1620×48mm (2024)
- A-⑬《オウラ》457×380×23mm (2023)
- A-⑭《セタカワアゲテイク》3 333×457×20mm (2024)
- A-⑮《セタカワアゲテイク》2 333×457×20mm (2024)
- A-⑯《セタカワアゲテイク》3 410×320×18mm (2024)
- A-⑰《みみのあし》アクリル、綿布、パネル、227×225×20mm (2021)
- A-⑱《ギルギルギルギルギル》アクリル、綿布、パネル、242×333×20mm (2021)
- A-⑲《荷葉》アクリル、綿布、キャンバス、158×227×20mm (2019)
- A-⑳《なむ》アクリル、綿布、パネル、275×222×20mm (2023)
- A-㉑《わたしの庭》アクリル、綿布、パネル、227×158×20mm (2022)
- A-㉒《想う》アクリル、綿布、パネル、335×243×20mm (2022)
- A-㉓《林道》アクリル、綿布、パネル、335×243×20mm (2022)
- A-㉔《Jump》アクリル、キャンバス、パネル、227×158×20mm (2019)

羽部ちひろ

私はゾアアークアップション、洋館など自然にあるものをモチーフに描きます。自然にある何もない物と樹幹や樹皮を見た写真、SNS で投稿される非日常に近い風景の景色なども私自身の中に蓄積されています。それらのイメージを組み合わせて描きます。近景と遠景を一つの画面に描くことで身近なものから世界の見え方の多様性を表現できればと考えて制作しています。

私はよく物語の続きを想像します。ドラマや映画など最後で済む自分の手で物語にこうなったのかなと想像したりします。電車から見える家には、この家は木が空に伸びている。そしてその木はドラゴンで覆われて優雅に……。など勝手に物語を作っています。今回の展示で私たちが二人の作品を見て想像して楽しんでもらえたら嬉しいです。

赤松加奈

子供が生まれて数ヶ月経った。お父さんがいよいよちゃんに、お母さんがばあちゃんに、夫は父ちゃんに、そして私は母ちゃんになった。そのような具合に、これまで僕が描きだしてすべてのものごとには、子供が生まれた瞬間にフィルムにスクリーンのようにシャッフルされて、星のように散り散りに広がっている。これからまた新しく出会い、もう一度ひとつひとつ確を決めて新しい形になっていく。

そんな風に期待して少しずつ絵を描いてきた。今回出された羽部さんらにいただいた。油絵の具の奥深さと一緒に絵の輪から遠くまで飛んでいけるようなわくわく感。これから私たちはどうやっていくのだから！

倉庫

- A-①《さよの海の海のはなし》アクリル、キャンバス、パネル、1803×1803×48mm (2022)
- A-②《コーナール》紙、デジタル、アクリル絵の具など (2022-2024)
- A-③《赤い糸の》アクリル、綿布、パネル、242×333×20mm (2022)
- A-④《渡》アクリル、綿布、パネル、242×333×20mm (2022)
- A-⑤《毎日のつづき》アクリル、綿布、パネル、220×273×20mm (2022)
- A-⑥《山の少年》アクリル、綿布、パネル、333×225×20mm (2022)
- A-⑦《松林》222×275×20mm (2022)
- A-⑧《松がったみかん》アクリル、綿布、パネル、300×300×20mm (2022)
- A-⑨《昨日でできた景色》700×248×20mm (2022)
- H-⑩《ドローイング》紙、油彩、330×235mm (2022-2024)

廊下

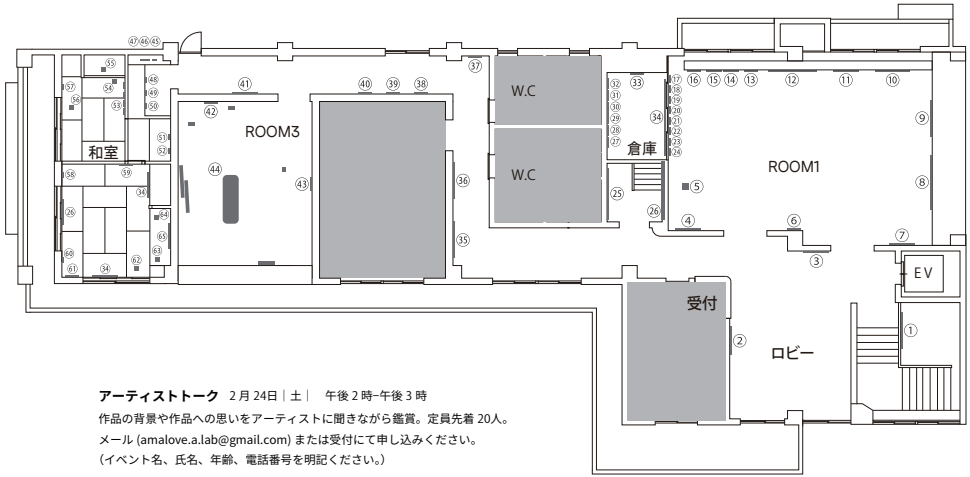
- H-⑪《創製の瞬間》キャンバス、油彩、727×910×25mm (2022)
- H-⑫《縫製の瞬間》キャンバス、油彩、727×910×25mm (2022)
- H-⑬《ペンダングから眺める》キャンバス、油彩、400×520×23mm (2022)
- H-⑭《キャネンアゲテイク》キャンバス、油彩、540×655×23mm (2022)
- H-⑮《ワニのアンテナインシャツ》キャンバス、油彩、455×530×35mm (2022)
- H-⑯《夜に散歩》キャンバス、油彩、405×570×17mm (2023)
- H-⑰《寝る前に読む》キャンバス、油彩、727×910×25mm (2023)

ROOM3

- H-⑱《犬の静かな夜》キャンバス、油彩、220×270×15mm (2024)
- H-⑲《朝顔の散歩》キャンバス、油彩、400×400×35mm (2023)
- A-⑳《animals》アクリル、キャンバス、木材、針金、発泡スチロール、綿、サイズ可変 (2015)

和室

- H-①《白い雲の模様》キャンバス、油彩、200×200×35mm (2023)
- A-②《drawing》アクリル、紙、130×130×35mm (2020)
- A-③《ガ》アクリル、紙、130×130×35mm (2020)
- H-④《見る》キャンバス、油彩、220×270×15mm (2024)
- H-⑤《フェンスの向こう》キャンバス、油彩、270×220×15mm (2024)
- H-⑥《エレベーターについて》キャンバス、油彩、270×220×15mm (2024)
- A-⑦《砂漠》アクリル、綿布、パネル、273×220×20mm (2022)
- A-⑧《モモ》222×275×20mm (2024)
- A-⑨《drawing》アクリル、紙、280×240×35mm (2020)
- A-⑩《小犬園》土、120×55×120mm (2023)
- A-⑪《春の庭の花のつぼ》土、130×120mm (2023)
- A-⑫《夏の庭の花のつぼ》土、250×175mm (2023)
- H-⑬《洞窟の入り口》キャンバス、油彩、270×220×13mm (2024)
- A-⑭《伸くち（黒 Na2）》アクリル、キャンバス、パネル、158×227×20mm (2019)
- H-⑮《車で向かう》キャンバス、油彩、400×400×35mm (2022)
- A-⑯《モモ》222×275×20mm (2022)
- H-⑰《ゾアアークアップション》キャンバス、油彩、320×410×20mm (2021)
- A-⑱《田に生む生物のつぼ》土、210×165mm (2023)
- A-⑲《エゴロコシのつぼ》土、90×80mm (2023)
- A-⑲《ねざ地生のつぼ》土、262×195mm (2023)
- A-⑲《目とイメージのドローイング》 シンブルキャンバスビデオ、5分 18秒 (2020)



アーティストトーク 2月24日 | 土 | 午後2時-午後3時

作品の背景や作品への思いをアーティストに聞きながら鑑賞。定員先着 20人。

メール (amalove.a.lab@gmail.com) または受付にて申し込みください。

(イベント名、氏名、年齢、電話番号を明記ください。)

A-LAB Archive vol.44

Exhibition Vol.42

「テーブルにトマト」

2024 (令和6) 年2月17日(土) - 3月31日(日)

2025 (令和7) 年 3月 初版第1刷発行

【発行】

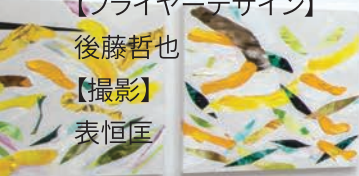
尼崎市 文化振興課

【フライヤーデザイン】

後藤哲也

【撮影】

表恒匡



A
LAB

問い合わせ先:

尼崎市 文化振興課

TEL: 06-6489-6385

FAX: 06-6489-6702

E-mail: amalove.a.lab@gmail.com

 @alab_amalove

 @amalove.a.lab

www.ama-a-lab.com

